

◆山下英一著 グリフィスと福井

〔福井県郷土新書5 福井県郷土誌懇談会刊〕

三 上 一 夫

『皇国』(The Mikado's Empire)で著名なウイリアム・エリオット・グリフィス(W. E. Griffiths)が、維新期の

越前藩のお雇い教師として大いに活躍したことは周知のとおりであるが、県立足羽高校で教べんをとる山下英一氏は、長年にわたるグリフィスを中心とした諸研究の成果を一本にまとめて、このほど県郷土誌懇談会から刊行した。

本書の構成は、まず「グリフィスの生涯」を(1)フィラデルフィア時代(2)ニューブランズウィック時代(3)ジャパン時代(4)ニューヨーク州時代に大別し、彼の生涯の多彩な人間像を実証的にしかも興味ぶかく描き出している。次に「お雇い科学校教師グリフィス」と題し、(1)春嶽の越前藩(2)お雇い教師招聘(3)グリフィス授業内容(4)廃藩置県とグリフィス(5)グリフィスの福井生活に区分して、藩校明新館での教育指導(理化学)はじめ福井での生活を中心に、当時の時代の大きな変革、特に文明開化や廃藩置県をどのように肌でとらえたかをリアルな筆致で記述する。

さらに「福井の英学」では、(1)明治政府のお雇い制度(2)英学の伝統をつくった人(3)グリフィスの英語教科書に三分し、

彼のほかに福井での英学発展に重要な役割を果たしたルセー、マゼット、ワイコフはじめ瓜生寅、雨森信成、今立吐醉らの様々な具体的動向をつぶさに著わしている。

また「グリフィス日記」として、「*Journals of W. E. Griffiths*」から、彼の越前入りの明治四年（一八七一）三月一日より離福する翌五年一月二二日までの日記の訳文と補注を掲載する。その原本資料は、アメリカ・ニュージャージー州立ラトガース大学アレグザンダー図書館内の『グリフィス・コレクション』に所蔵されるが、本書には最後にその原文を収録し、研究者の参考に供している。これらは、山下氏がかつてラトガース大学を訪れ、現地でグリフィス関係の大量の資料を探索、収集するとともに、県立図書館、福井市立郷土歴史博物館所蔵の関係史料はもちろん、県内外の諸文献・研究書を精力的に調査研究した成果によるもので、その点、著者が英文学専攻者でありながら歴史学の本領をも立派に発揮したものともいえる。

また「グリフィス日記」は、明治四年の廃藩置県——全国の藩を廃して府県に統一し、中央集権の権力成立に一時期を画する大変革でもあるが——前後の福井における政治・社会・文化面の特筆すべき様々な事情を丹念に日記文で伝えることは、史料的にも極めて貴重であるが、山下氏が的確な訳文に加え、詳細な補注を付したことは、地元の維新史研究のうえでも大いに役立つわけである。そのさい特に注目すべきは、藩庁の要人はじめ藩校の諸教師や生徒との公的、私的交渉が生き生きと描写され、また福井町内外の四季の景観や民衆の日常生活、農家の生産活動など、簡明な記述のなかに、当時の実情を学びとることができ、はなはだ興味ぶかいものがある。

要するに本書は、グリフィスへお備い教師の目からみた「福井の維新史」を構築した極めてユニークなもので、しかも日本英学史学会員としての研究視角をふまえているだけに、「福井の英学史」としての貴重な内容を包摂したものといえる。

本書の「序文」で同史学会幹事の池田哲郎氏が「この快著が、本邦英学史上の画期的業績として、アメリカのグリフィス研究家、ボーチャム氏のそれに比し、遜色のないものであることを疑わない」と絶賛するとおり、県内外の研究者はもちろん、一般読者からも高く評価されるであろう。なお巻末に、グリフィスの家系、主要参考文献、グリフィス関係年表、人名索引を掲載し、読者の便をはかっている。

（福井PRセンター刊、新書判、三二二ページ）
（付英文日記八四ページ）定価一〇〇〇円